

大和市指定重要有形民俗文化財「福田の廻り地蔵及び講中道具」

1. 概要


廻り地蔵まわりじぞうは、大和市福田しんみちしたの新道下及び外記明げきみょう（名）で寛政3年（1791）から平成25年（2013）までおこなわれていた民間信仰行事。本尊は木造地蔵菩薩半跏像もくぞうじぞうぼさつはんかぞう（廻り地蔵）。地蔵じぞうは厨子ずしに収納され講中各家を廻り、毎年10月4日の地蔵講の縁日には百万遍ひやくまんべんの数珠繰りじゆずぐがおこなわれた。

廻り地蔵は庶民信仰が盛んになる江戸時代以降の習俗であり、相模では横浜市港北区下田町の真福寺しんぶくじの廻り地蔵が有名。真福寺の廻り地蔵は宝暦7年（1757）から巡行じゆんこうが始まっている。広域な巡行圏を持ち、大正時代の記録には、神奈川県では川崎、横浜、大和、座間、海老名、厚木、相模原、鎌倉、茅ヶ崎、東京都では世田谷、大田、品川などの大山街道沿辺と丹沢の北の津久井郡一帯の名が見える。


福田の廻り地蔵には、「伊豆の国の下田から地蔵を背負って歩いてきた人がいたが、体をこわして運べなくなったため土地の人が地蔵をもらい受けた」との伝承がある。前述の横浜市港北区の下田と伊豆の下田は間違っちがて伝えられることが多いので、福田の廻り地蔵も下田真福寺の廻り地蔵の影響下に、村落内じゆんこうぶつに留まる巡行仏として始められたものと推察される。


本件廻り地蔵及び講中道具は、江戸時代に相模・武蔵で隆盛をみせた廻り地蔵という民間信仰行事が、市内でも長年にわたって独自に継承されてきたことを示すものであり、市域の習俗を後世に伝えるものとして重要である。

2. 文化財の内訳

<p>木造地蔵菩薩半跏像<small>もくぞうじぞうぼさつはんかぞう</small>（廻り地蔵）</p>	
<p>像高 23.8cm 膝張 20.3cm 像奥 18.4cm</p>	
<p>岩座上の蓮華座<small>れんげざ</small>に左脚を踏み下げて座す地蔵像。廻り地蔵は銅造が比較的多いが、本像は木造である。丁寧な彫技でつくられており、江戸時代中期18世紀ごろの作と推察され、厨子内木札1にある寛政3年（1791）を造立年とみてよいと思われる。厨子内木札2には嘉永7年（1854）に再建<small>さいこん</small>されたと記されている。平成11年（1999）に修復がおこなわれている。</p>	

大和市指定重要有形民俗文化財
「福田の廻り地蔵及び講中道具」

<p>ずしないもくさつ 厨子内木札 1</p>	
<p>縦 51.4cm 横 25.2cm 寛政3年(1791)のもの。「奉造立地蔵菩薩尊 開眼師常泉十三世日記之」とあり、中福田の常泉寺の住職によって造立されたことがわかる。</p>	<p>(表) (裏)</p>

<p>ずしないもくさつ 厨子内木札 2</p>	
<p>縦 34.9cm 横 16.9cm 嘉永7年(1854)のもの。「廻地蔵尊像再健(※) 清流山常泉禪寺現住沙門」とあり、この年に地蔵が再建されたことを示す。 ※健の字は原文のママ</p>	

<p>ふせがね 伏鉦</p>	
<p>面径 15.1cm 底径 17.4cm 高 7.2cm 底縁幅 1.2cm 銅鑄製。底縁に「新道下外記明念佛講中大正四年拾月」と線刻されている。 ※個人蔵</p>	

大和市指定重要有形民俗文化財
「福田の廻り地蔵及び講中道具」

おおじゆず
大数珠

長 939.0cm 親玉径 9.1cm
子玉径 4.4cm

明治～大正時代。10月4日の地蔵講の縁日におこなわれる^{ひやくまんべん}百万遍の数珠繰りで使用した大数珠。百万遍数珠ともいう。親玉は丸く巨大で、子玉はやや扁平であるが大きく、側面は丸みをつける。



ずし
厨子

高 104.0cm 幅 65.5cm
奥 67.2cm

観音開きの扉を開けると^{けんどん}慳貪式の格子戸があり、本尊である地蔵菩薩はその奥に安置される。下部には引き出しがあり、半分引き出した状態で線香立て、リン、ロウソク立て等の道具をのせるための中蓋がついている。引き出しの中には道具一式が納められている。厨子の裏には背負われて各家を廻るための紐がついており、かつては麻に布を入れて編んだようなものだったが、現在はナイロン製である。講中には、現在の厨子は三代ほど前に下和田の山田さんという建具屋に作ってもらったとの伝承がある。引き出し裏には「□治三拾三年□」「山口」の墨書があり、伝承とあわせて明治33年（1900年）が建築年代と考えられる。



